

座談会

いま、

子ども（小学生）は どうなっているか

出席者（発言順）

金子 邦秀

（大学社会学部教授）

塘 利枝子

（女子大学現代社会学部助教）

石川 博三

（附属小学校設置準備室専任者）

丸中裕美子

（附属小学校設置準備室専任者）

奥野 博行

（附属小学校設置準備室専任者、副校長予定者）

鈴木 直人

（大学文学部教授、附属小学校長予定者）

司会 本誌編集委員

子どもを取り巻く現状

司会 ● 同志社小学校が来年開校します。そこで本日は、いまの小学生の現状、それに対して私たちが考えなければならぬことは何かを多面的に議論して、同志社小学校はどのように子どもたちを教育すればよいかを導き出したいと思っております。最初は自己紹介を兼ねて、小学生をめぐる動向や感想についてお話しいただきます。

金子 ● 私は学校教育学、社会科学教育学を専門としています。特に、米・仏の小・中・高の社会科学の教材について、また、それに加えてコンピュータを用いた教材開発を進めております。

さて小学生の現状ですが、最近小学校に入る前の段階でもうすでに、子どもが一緒のことができないのです。本来なら幼稚園の何年か、小学校の何年かでしつけをしたり、いろんな団体である程度型を習得したりするものですが、このパ

ターンを習得するという教育が弱くなってきたんじゃないか。「個性の尊重」という教育の指針がどうも勘違いされているようです。最初から定食メニューにするのではなく、いきなりアラカルトから始まっている。「パターンを失っていること」が個性化や個別化であるかのような誤解があるのです。

確かに給食にしてもアレルギーのある子とかがいいますから、それなりに個別の対応は必要なんです、小学校ではある

程度共通の栄養を摂らせるといいますか、共通のものを集団で作り上げていくという経験をさせておいて、基本的なものを身につけた上でそれぞれの個性を開

かせる。それが大切なのではないかと思

います。学校教育学という私の専門から言いますと、本来どの子ども、どの国民にも共通に、これだけのことは身につけさせたいという理由で近代教育が始まった。そこを抜きにしてしまつて最初から個性、個性と言われると、せつかく将来において発揮されるべき個性も発揮されないのではないのでしょうか。今、フリーターの問題が広がっていますが、こういうことがしたいと思つた時にそれに必要な力がついてない、国語や算数の力がついてなかったら結局何もできないということになるわけですよね。小学校の中で、やはりこういう基本的な力をつけるということが、今いちばん子どもにとつて必要なんじゃないかと思つています。

塘 ● 私の専門は発達心理学と文化心理学で、研究テーマは主に子ども観、子どもに期待される発達期待です。具体的には、アジア6カ国とヨーロッパ3カ国の教科書の内容について比較分析して、そこに描かれている家族像または「いい子像」について分析しています。それとともに、近年多く来日する外国人子女の受け入れ

について、就学前から児童期までの子どもを対象に研究しています。また、私が所属する女子大学現代こども学科では、8割ぐらいの学生が小学校教員を以て目指していますので、小学校教員を養成するという立場から子どもに関わっていると云えます。

先ほどのお話にもありましたように、子どものコミュニケーション力の問題は、実は教師のコミュニケーション力の問題なんです。今は同僚と話ができない、連携して授業が作れないなど、教師が自分の殻に閉じこもつてしまつて、お互いに連携がうまくいかない。それがやはり子どもの問題にも下りてきているのではないのでしょうか。私は学生に「どんなボランティアをして地域に出なさい」と呼びかけています。たとえば地域で、中国人に日本語を教えるボランティアをやっているんです。そこでは、やはりいろんなコミュニケーション力をつけていくことが大切なんです。しかも学生がこのようなボランティア先で接する人の中には、日本語を全く話せない人もいますので、日本語が通じない中でもい



出席の6人（左から石川、丸中、奥野、鈴木、金子、塘の各氏）

かに相手に自分の言いたいことを伝える努力をするか、もうとにかくポディランゲージでも何でもいいから、コミュニケーションを取りなさいと言っています。そういう形で実践的にコミュニケーション力をつける「仕掛け」をいろいろ学生に対して作っています。そうしないと結局は現場に出て、同僚とも子どもともコミュニケーションできないような教師になってしまいます。

今の世代の学生は子どもと接したことが実際にはあまりないんです。きょうだいがいない、いともそれほど多いわけではない。遊びも孤立化している、そうすると遊び方も分らない、子どもにもどうやって話しかけていいか分からない。小学校の先生になりたいと思ってる現代子ども学科に来たとしても、実際に子どもと接すると、「こんなはずじゃなかった」と思うことがあるらしく、その背景にはやはり子どもと接する経験の不足が考えられます。そういう経験を大学で、遅まきながらもつけさせていくということは大事じゃないかと思えます。

子どもの特性自体はそれほど大きくは面だけ見ているのではないですか？」などと、まるで子どもを全面否定しているかのような言い方をされます。これはどういうことかと考えてみますと、保護者自身に自信がないのではないのでしょうか。子どもを注意されるといふことは、今までの子育てをすべて否定されたような、そういう大きなものとして捉えられてしまい、子どもと同じようなレベルですごく子どもをかばわれるんです。それは保護者をかばっているのかもしれないのですけれど。保護者や教師は子どもより大きな立場で導いていくというように、姿勢とか、位置であるはずなんです。子どもと同じ立場になってしまっている

変わっていないと思います。むしろ大人が変わってしまったのではないのでしょうか。学校の中では、特に教師が変わってしまった。教師は時間に追われて忙しく自分がやりたいことも教育にかける情熱も、そのうちだんだん失われていくような要素が学校の中にあるのではないかと思うのです。したがって、学校は教師をいかにサポートしていくかということも考えないといけない。教師が一人頑張つて燃えつきてしまうようでは、子どもにとつてもいい影響を与えないと思いません。

どんな子どもを育てたいのか、どんな子どもになってほしいのか。それを先生と学校全体でしっかり考えていく。しっかりしたビジョンがとても大事だと思います。そして具体的な教育内容について教職員が一丸となって考えていく、そのためにはコミュニケーション力も含めて、教師に高い資質が必要だと思います。それと同時に学校全体の風通しを良くして、先生も仕事をしていて楽しいんだというような、そんな学校作りが必要ではないかと思つています。

というのを最近感じます。教育というのは「何々しつつかある」という発展途上の形だと思ふんです。だから折りつつであるとか、悩みつつつであるとか、生活しつつか何かを作り上げていくという過程が学校教育であるはずなのに、完成されたものしか認めないというような姿勢を保護者に感じます。ころんだ子どもの立ち上がるのを待つてあげたい。一緒に歩みながら、成長するのを待つてあげたい。そういう待つ教育、失敗が認められる教育をしていきたいと思ふますし、そのためには教育というのはすべて準備されたものではなく、すこく不便であった方がいい。一緒に悩みながら

やつた方がいいんじゃないかと思ふます。不便なことによって失敗させ、工夫させ、体験させていくということが、これからは大事なのではないかと思ふます。

丸中●私もこちらにお世話になるまで小学校の現場におりましたので、就職した頃に比べると保護者が変わってきたことを感じますね。親が変われば子どもが変わるのは必然です。特にお父さんが変わってきて、ちょっと刺身のつまみたいな感じなんです（笑）。学校にクレームやご相談事があると、私学の場合とはくにご夫婦揃つてお見えになることが多いのですが、主にお母さんがわあつと先生にいろいろなことを言つて、横でお父さんが「そつだそつだ」というふうにな。それでご夫婦納得して帰つていただくパターンが非常に多いのですが、お父さんもせめて刺身のワサビぐらいになつていただけたら、家庭でもピリツとした縦の関係ができてくるのではないかと思ふます。



金子 邦秀氏

かねこ・くにひで／1950年生まれ。1973年早稲田大学第一文学部卒業。1975年広島大学教育学研究科修士課程修了、1977年同研究科博士課程中退、博士（教育学）。専門は学校教育学、社会科教育学。現在の研究課題はハイパーメディアを用いた社会科教材開発。全国社会科教育学会理事、日本社会科教育学会評議員、社会系教科教育学会理事、教育文化学会評議員、日本グローバル教育学会常任理事。
主な著書・論文に『日本史教育に生きる感性と情緒』（教育出版、1989年）、『アメリカ新社会科の研究—社会科学的に内容構成—』（風間書房、1995年）、『社会科教育学のニュー・パースペクティブ』（共著、明治図書、2004年）、『ハイパーメディアによる教材開発（4）』（『教育文化』2005年）ほか多数。

家庭自体が、横の社会になつてしまつているのではないのでしょうか。昔に比べて

てお姑さんと同居することが非常に少なくなりましてよ。学校で何かあっても、以前ならお姑さんに相談するとか、諫めてくれる方がいらしたんですが、今は自分一人で悩まなければいけない。どうしてもお母さん一人で頑張っているという印象があります。じゃあ、お父さんに助けて欲しいと思っても、仕事が忙しかったり、学校のことはよく分からなかったりする。お母さんにお任せで、つまになってしまっているんですね。家庭が横社会になってきた、それが子どもたちが変化してきた一つの要素だと思っています。

私は小学校の英語教育に携わってきたことが多かったのですが、小学校の英語教育は、結局根本的なところは、人とコミュニケーションをとっていくための力を育てるものであるということです。ですから、単語を10個覚えたとか20個覚えたとか、そういうことが目的ではありません。英語で相手の言っていることはよく分からないけれども、何とか相手の思いを理解し、自分の意思も伝える力を育てることで。

奥野●私自身はこの10年ほどクラス担任をしていませんが、私が若い頃に担任をした子どもたちに比べて、今の子どもたちが少しずつ変わってきているとは思っています。やはり一つには少子化の問題。家の中の様々な事柄については受け身であることが多く、自分から積極的に関わることなく、そのまま育ってしまった。ところが今、子どもたちは少数予約型の遊びをしますね。電話で「誰々ちゃん、遊べる?」「だめ、予約がある」。友だちとの関係において、先が見通せない不安なんでしょう。昔は犬も歩けば棒に当たるかのように、自分から歩いていって遊び相手を求め回ったものです。その中で一緒に遊んだり、時には遊び相手が見つからないなどということを経験して、自分の心に折り合いをつけながら生活していたわけです。

また、子どもたちは遊びやゲームなどの中で、負ければ悔しさを、勝てば嬉し

さを知ります。負けたら悔しいけれども、みんな力を合わせて戦ったという何かが残ри、悔しいながらも納得できる、つまりここでも、自分の気持ちに折り合いをつけるということが以前はあったと思います。しかし、最近の子どもたちはぶつかり合った後、負けたら「負けた」という結果だけが残り、それが悲しくて、いつまでも泣き叫ぶ子がいたりする。

これらは実体験の不足によって、人間関係を築く力、あるいは自分自身を振り返って新たに関係を作っていくこととする力、悔しい思いもしながら、しかしいろんな言葉かけをってもらうことによって次に立ち向かう力を身に付けることが不足していることの表れではないでしょうか。実際には子ども自身は、そんなには変わっていない面はあるのだろうと思いますが、これが一つ目です。

二つ目に教師の問題で言いますと、最近の先生方というのは、よく勉強できる方が多くなったというのは事実なんです。私が今22歳だったら絶対に採用試験に受からないと思いますが、皆さん非常に一生懸命勉強してこられる。ところが

子どもたちとの関係という、リアルなものへの想定ができていないのです。この時に一番大事なのは、先ほど塘先生がおっしゃったサポート体制なんです。私は昨年度まで公立学校に勤めていたんですが、初任者の先生がいました。その中で何かあるとパニックになって本当に大声で泣き叫ぶ子がいました。やがて保護者が来られる。もちろん保護者に対する対応の仕方は学校で事前に話し合っているのですが、初任者の先生は応答できないんです。そのときにベテランと一緒に

ついて、その教師の思いを語りながら、あるいは保護者の思いを受け止めながら善後策を話し合うという態勢が、二つ目

の問題として大事だろうと思います。後は保護者の方とのパートナーシップも大切です。どちらの言うことが正しい、正しくないではなくて、本当に一緒にその子どもをどうしようかという話がないと、すれ違ってしまふと思います。

親の自信喪失が子どもに影響を与える

鈴木●私の専門は感情心理学で、子どもの問題には昔から何かと関心を持っています。今の子どもの問題というのは、少子化、核家族化などいろんな問題が複雑に絡みすぎているんじゃないかと思いません。たとえば先ほど丸中先生がおっしゃ

ったお母さんが孤立しているという話ですが、これは都市化、核家族化によってお母さんは周りに相談する人がいなくなったために、子育てについて一人で悩まざるを得なくなってしまうのです。

それからもう一つ、家電製品が非常に普及してきたことも一つの原因だろうと思うのです。これによってお母さんに時間ができて、母親の注意が子どもに向くようになってきたんじゃないでしょうか。またもう一つ、高度成長期のあたりから父親が不在になってきたことも他の要因だろうと思います。家庭を顧みなくなってきた、家のことはお母さんに全部お任せになってしまっている。お母さんは任せられたけど相談する人がいない、自分で悩まなければいけない、いろいろな時間が取れるようになってきたから子どもに注意が向いてしまう。この辺は全部悪循環じゃないかと思いません。



塘 利枝子氏

とも・りえこ／1990年青山学院大学文学部卒業。1992年白百合女子大学大学院文学研究科修士課程修了、1995年同研究科博士課程単位取得退学。専門は発達心理学、文化心理学。現在の研究課題は、教科書に描かれた発達観の異文化間比較、子どもの異文化受容。異文化間教育学会常任理事、臨床発達心理士資格認定委員、日本発達心理学会、日本心理学会、日本保育学会、等会員。

主な著書・論文は『アジアの教科書に見る子ども』（編著、ナカニシヤ出版、2005年）、『子どもの異文化受容』（ナカニシヤ出版、1999年）、『教科書の中のジェンダー—ジェンダーと心理学』（共著、有斐閣、2003年）、『日英の教科書に見る家族—子どもの社会化過程としての教科書』（1997年、日本発達心理学会論文賞受賞）ほか多数。

いわる親離れではない、子離れできない母親ができるようになった。あるいは子どもは母親に依存し、母親は子どもに依存するという共依存の時代になってしまったのかなあと。情報化の問題も大



石川 博三氏

いしかわ ひろみ／1960年生まれ。1982年大阪教育大学教育学部教育学科卒業。公立小学校常勤講師、私立小学校教諭を経て、2005年4月より同志社大学附属小学校設置準備室勤務。主な教育実践テーマは、「日記指導を柱とした学級作り」。すべての子どもたちが、クラスの中で安心して自分を出すことができる、そんな学級作りを目標としている。

きいと思います。コンピュータ等が発達して自由にいろんな情報を取り入れられるのですが、あまりにもたくさん情報があるため、どれが自分に必要なものなのか分からない。同時に子どもにすれば、ゲームは非常にバーチャルな世界です。そこから、そこで人を殺そうが切り刻もうが何をしようが、自分には何の痛みもない。でも実際に喧嘩をし、人を殴れば手は痛いわけですよ。それを経験することなくバーチャルな世界で育ってしまう。母親もそういうことをそれほど悪いとは思っていないところがある。コンピュータが使えたらそれでいいじゃないの、などというところが。親の価値観の変容と

いう問題も大きいと思いますね。私たちが育てられた時代というのは、絶大な権力を待った父親のもとで育てられた。いいも悪いも父親が言うことは絶対でした。ところが最近の我々は、自信を持って自分の考えを子どもにも与えることができなくなっている。私より年齢の下の方はもつとそれが難しい。自分にとっての子育ての拠り所をつかむことが、なかなかできなくなってきた。教えられていることだけがいいのか？そうでもない。どうも自分たちが育ってきた道とは、ちよつと違う…というようなところで、非常に矛盾を感じてしまう部分があるのではという気がします。

食べ物の問題もあるんですね。清涼飲料水、あれは糖分がものすごく高いのです。ああいう糖分を摂るとエルヴィス・プレスリーではありませんが、一過性の中毒になることがある。一過性ですが血糖値が上がりますよ、血糖値が上がると高揚感を持つことができます。そういうものも多分に影響を与えているでしょうし、高カロリー食も影響を与えているでしょう。いろいろな問題を背景にして子ども社会が多様に変容をしてくているというのが問題なのでしょう。

も同士の触れ合いが増えてきたというデータも出てきました。芝生の上で自由に駆け回り、走り回ることができることが、子どもたちに良い影響を与えているようです。この間ラグビーの岡先生とお話をしましたが、外国で子どもたちがラグビーをする時は、ボールで勝手に遊んで、芝生の上でごろごろ転がっているそうです。先生は危険なことだけ注意しておけば、後は子どもたちがボールとじゃれ合いながら本当のキャッチングを自然に覚えていくものだ、と話しておられました。こうした仕掛けが必要なのではないか。本当は仕掛けまでして友だちなんかを作る必要はないのだと思います。友だち

は、できるものです。でも、大学生でも友だちの作り方を教えてくださいと言ってくる時代なんですよね。司会●いろいろな問題が出されましたが、親の問題は共通していました。私も小学生の親の一人ですが、学校に対して子どもをあまり縛りつけてほしくないという感覚を持っています。ですから、親として学校からあれこれ言われたくないという感覚はよく分かります。それは学校に対する親の期待が変わってきたことを意味するのでしょうか。

なりのスタンス、確信を持つてものを言われたのです。ですから、それに対してこちらも具体的なお話ができた。最近の保護者の特徴といいますと、わーっと大きな声でいろんなことを言われるのですが、実際に学校に来ていただくと、実は話を聞いてほしい、親御さんたち自身もどうしていいか分からないという場合が随分多い。

先ほどパニックを起こした女の子の話をしました。お父さん、お母さんも、実は教師でいらつしやる。で、お母さんもパニックを起こされてお父さんはどうしていいか分からないと、随分悩んでいらつしやるのです。いつでもいいからともかく、時間がある時に夫婦揃いで学校に話をしに来てくださいますと約束をしまして、じっくり話を聞きますと、実は家族の中でも話が出ていない。

奥野●ひと昔前の保護者だつて、学校に對していろいろなことをおっしゃいます。けれど、それは確実な方向性や自分

子育てについて、お互いに本当に腹を割った話をして、何が問題かという整理をしていくことが今、ものすごく必要だろうと思います。中教審の答申の中で、家庭教育が教育の出発点である、そ



丸中 裕美子氏

まるなか ゆみこ／1978年京都女子大学文学部初等教育学専攻卒業。京都市立小学校教諭、アメリカ日本人学校教諭、私立小学校教諭を経て、2004年より同志社大学附属小学校設置準備室勤務。小学校英語活動、英語で全教科を教えるイマージョン教育に携わる。英語をコミュニケーションの道具として、異文化を理解し、豊かな表現力で自分の意見を伝えることのできる国際人の育成を目指している。

のことを家庭がしっかりと認識する必要がある、と。それは世間の押し付け合いではなくて、互いにそのことを原点とし、では何をしていたのか、教育現場ではだから何をするのかという話をしっかりととしていくこと以外に道はないのではありませんか、という気がします。

石川 ●保護者にすごく不安感があるから、すぐ結果を見たがる方が多いのではないのでしょうか。いま「百マス計算」とかがありますね。確かに勉強の手段としては評価していますが、あれは何分以内で終わります、というようにその場で結果が見えるんですね。苦勞している過程ではなく、結果が見える物に対して保護者は非常に安心感を持たれます。将来のためにというような漠然としたことを言っても、それは待てない。不安で不安で、いま目の前の結果が欲しいという感じが見受けられます。

お母さんも、もう私は子育てで傷つきたくないという思いをすごく持つてらっしゃるので、否定せずにお話を伺っていると非常に好意的に見てくださるし、ものすごく協力してくださいます。たとえ

ば、これは個人的には困るのですが、夜に電話がかかかってきて、「子どもが私の言うことを聞かないで泣いてるんです！」と言われる。とりあえず何か気持ちを伝えたい様子で、私からも明日お子様の気持ちを聞いてみますね、と言うと安心して切られる。保護者は不安感をため過ぎて、攻撃的になってしまっているのではないかと感じています。

鈴木 ●東京で2000年でしたか、子どもの相談室を作りましたね。ああいうものができていくといいのですが、全国にはないんですよね。そこでは何でも相談できる。そういうものがないから学校の先生にかかってくる。

塘 ●私は不登校の子どものカウンセリングも学外でしていますが、子どもの問題が実は保護者自身の問題だったりすることがあります。子どもの相談に来て自分の気持ちを聞いてほしいという保護者が、今すごく多いですね。学校の先生にとつても保護者の問題は大きいかと思いますが、先生がどこまで子守ではなく「親守」をなさるのか、あまりにも保護者からの相談があると先生も疲れてしま

コミュニケーションとサポーター体制の向上が必要

奥野 ●先ほどの線引きについてですが、あえて言いますと、私は境界線はないと思います。ここまでは誰の仕事で、ここからは誰の仕事だという考え方をした時に、たぶんストップしてしまうのではないのでしょうか。この子どもたちが本当に育ってほしいと思えば、その子どもたちがなぜこうなんだろうと思った時に保護者から話があつて、やはりきつちりと話をお聞きするというのが本来の姿だろうと思いますし、そうできる力がみんなに備わっていればそれに越したことはありません。

ません。

たとえば保護者がいろんなことを言うてこられた時に、上手に保護者を叱る先生がいますよね。保護者がものすごくその先生に叱られると納得する。でも他の先生が別の言い方でしたら、ものすごく反発するという事例はいくつもありました。それは本当にその先生の思いが伝わっているからこそ、きつい言い方にせよ、温かい口調にせよ、受け入れてくれていくということが理解できるのだろうと思います。先ほど塘先生が、先生同士のコミュニケーション能力についておっしゃいましたが、実は小学校の授業ってコミュニケーションそのものなんです。つ

います。どこかで線引きをするのか、または外部とどのように連携するのか。難しいですね。

司会 ●大学における学生との関係でも、教員がどこまで関わるかについてはグレースーンがありますね。

鈴木 ●子どももまた、関わってもらえたらものすごく喜んでいて。こういう例もありませんよ。いつも盗みをしている子に声をかけるようにしたら、盗みはそれで止まってしまった。見てるぞ、監視しているぞという意味ではなくて「君のことをいつも気にしているからね」といった一言で盗みがパツと終わってしまうというケースが、子どもの場合はありますね。愛情不足というのか、自分が無視されていると思つているんですよ。子どもたちは、自分のことを考えてくれている人がいるということが分かった途端に、態度がころろと変わる。それを母親、父親がやってくれないから、そういうことを求めてくるということが多分にあるのだろうと思います。



奥野 博行氏

おくの・ひろゆき／1950年生まれ。1973年同志社大学文学部社会科学新聞学専攻卒業。

1977年4月より2005年3月まで京都府内の小学校に勤務。「生活に根ざす」「地域に根ざす」ことを柱とした、生活綴り方教育や社会科教育などを中心に教育実践を行う。

京都府宮津市立宮津小学校教頭、福知山市立天津小学校長等を経て、2005年4月より同志社大学附属小学校設置準備室へ。

著書に「小学校教育実践選書—ゆとのり時間をつくる—（共著）」（あゆみ出版）。

まり教師同士というよりも教師が子どもを教えるということ、あるいは育てること、すべてコミュニケーションなんです。その背景に教師の温かい思いがない限り、子どもも受け入れられないですよ。私がいちも思っていることですが、子どもが学校に来るといふ要素は、学校の授業が分かつて楽しい、一緒に生活し発達していく仲間がいる、そして三つ目に自分自身のことを分かってくれる先生がいて、いつも支えてくれる。この三つの条件があれば、きっと子どもは学校が楽しくなつて仕方ないだろうと思つてくれます。先生は当然自分のことを丸ごと分かるともは学校に対して信頼を持ってません。

鈴木 ●結局は関係性ですよ。先生と生徒の関係、先生と保護者との関係。

丸中 ●先生と保護者の関係も難しい時代になりました。私は保護者から毎日毎日ルーベがいるような連絡帳をもらったことがありません。返事をどう書いていいかわからないような内容で、虐待が絡んでいたものから、これ以上は担任としては限界だと感じた時がありました。児

童相談所に保護をお願いしても、当時はなかなか動いてくれなくて。担任だけで保護者を変えていくというのは子どもを交えるよりも難しいことで、行政としてのサポートなどがないと、担任の先生だけでやるには社会としていろんな問題が大きくなり過ぎていっている感じがします。公的な機関で、小さな子どものお母さんをサポートするシステムが最近各地にできてきましたが、これからは小学生の母親や先生サポート制度みたいなものが必要になるかもしれませんね。

金子 ●先生のサポートも必要だと思いますね。それから学校のカウンセラーの場合、どうしても限界があります。学校の中、地域の違う立場でといったような第三者的な見方が必要になると思いますね。それがあれば、すうつと解決できる問題もあります。とくに先ほどの親子関係で出ましたが、子どもは親や担任教師を選べない、教師もまた子どもたちを選べる訳ではないという関係の中で、ただで全部解決しようとするのは限界があると思います。

先ほど少子化問題が出ましたが、これ

から少人数学級というのが目ざされてくると、先生もある面では目が行き届くんですが、逆に言うとケースとしても少ない子どもに接していくことになるわけです。これをベテランの先生ならいいんですが、若い先生が一人で背負い込んでしまうと大変でしょうね。学校もそういう意味では小さな社会ですから、いろいろな年齢の先生がおられ、それぞれの感性で子どもを捉えることも必要でしょう。

もう10年、20年と先生をされてきている方の見方と、それこそお兄ちゃんお姉ちゃん目の目と父親母親の見方と、おじいちゃんおばあちゃんといったら失礼ですが、けれども、それぞれの見方は違います。こういう学校の教員構成についても、同志社も考えていくべきではないでしょうか。

塘 ●教員構成などに多様性があり、そこへいろんな保護者やボランティア、外部機関が関わってところが、いわゆる多開かれた学校だと思います。そういう多様性の中で子どもたちが、「嫌なこと」や大人の価値観とのぶつかり合いも経験しながら育っていくこと、そして大人同

乙訓、長岡京、向日町の2市1町がつくっている「ポニーの学校」というのがあります。ここには昔行っていたことがあるのですが、保健師さんとセラピストと障がい児の母親の間で、非常に密接な関係ができていたんですね。いろいろな問題は、ちょっとした時に立ち話みたいな形で相談している。もちろん時間を設けて相談するというのもありますが、相談が気楽にできるんです。そういう関係というのは一番いいと思うのです。

うなり、いろんな形が取れるでしょう。さつき芝生の話をしましたが、もし芝生化をするのならメンテナンスが大変ですから、それを手伝ってもらおう。そういう形で学校のいろんなことに関わってもらって先生とのコミュニケーションを作る。子どもたちがどういう形で学校や先生、友達と関わっているかを親が見ている、子どもも親と先生との関わりを見ています。これは私学だからこそできることの一つではないかと思えます。

それから多様性についてですが、同志社大学の知的資源、人的資源は大いに利用させてもらいたいと考えています。いろいろな方と関わり、いろいろな方に触

士も多様なものとの関わり合いの中で教育を作り上げていくこと、今後はこういうことが学校に必要なのではないのでしょうか。

鈴木 ●小学校の先生方に相談せずにこんな発言をしているのかどうか分かりますが、車に乗ってきちゃだめと言っても車で子どもを送ってきて、喫茶店などでおしゃべりしているお母さんが、たぶんたくさんおられると思います。こういうお母さんたちを学校も利用しない手はないと思うのです。学内に入ってもらって、いろいろなことをやってもらった方がいいんじゃないでしょうか。先生とのコミュニケーションも取れるようになりますしね。さつき石川先生がおっしゃったように夜な夜な電話がかかってきたらたまりませんが、学校で立ち話で「やあ、こないだこんなことがありましてね」「ああそうですか」という話なら、いくらでもできますからね。親御さんを学内に入れるとセキュリティ面でもプラスの面があると思います。変な人は入って来にくくなりますよ。保護者も安心されるのではないかと思いますね。

応用のための基本 そのバランスを大切に

司会 ●ありがとうございます。金子先生が小学校教育では、一つの型のようなものを教えることが必要になるという意味の発言をされました。この間、あまり子どもを型にはめない、管理しない流れが表れていることに対して、金子先生の場合は逆に型が必要ではないかということでした。そのあたりをもう少し教えていただきたいと思えます。

金子 ●私はずっと武道をやっています。最初は型をしつかり覚えるという伝統的な教育を体験してきました。しかしそれは型を覚えるのが目的ではなくて、



鈴木 直人氏

すずき・なおと／1947年生まれ。1971年同志社大学文学部卒業。1973年同志社大学大学院文学研究科修士課程修了、1974年同研究科博士課程中退、1981年医学博士（京都府立医科大学）。専門は感情心理学。現在の研究課題は感情表出と生理反応、空間的枠組みが直立姿勢に及ぼす影響。学校法人同志社理事・評議員。日本心理学会理事、日本健康心理学会理事、日本感情心理学会常任理事・事務局長、関西心理学会常任理事、他。主な著書・論文は『感情心理学への招待』（サイエンス社、2001年）、『学ぶ、教える、かかわる』（共著、北大路書房、1995年）、『一般感情尺度の作成』（『心理学研究』2000年）、ほか多数。

やがてはその型を使って自由にいろいろなことができるようになることが目的です。一定のトレーニングを積んだ上でそういう基本的なものを持つていて、初めて自由を獲得できるということが大きくある程度描写の陰のつけ方やいろいろなものを先ず知っていきなかつたら、自分が表現したくてもできない。先ほどコミュニケーションションということを言いましたが、日本語にしても英語にしても、しっかりととした言葉や基本的な語彙が必要です。今の英語教育でも中学1年生では学習する語彙がすごく減りましたから、いくらパターン学習をしても、応用ができません。

応用が利くかどうかということが基本の基本であつて、応用の利かないものはいくらやっても利かない。たとえば円周率の3・14を3で教えるかどうかという問題がありますが、教え方一つだと思うのです。3・14より正確だから3・14159がいいのかというと、そうとも言えないし、むしろ3というものを持つている意味が、実はおよその数だとい

うことさえ教えておけば、実際の生活の場面では役立つのではないのでしょうか。

鈴木●基礎は大切だということには本質的に私も大賛成です。算数をやるにしても、九九を知らなかつたらどうやつたつても不可能なんですよ。何を覚えるにしても同じこと。基礎がなかつたら上に伸びない、基礎のない応用はありえませんが、基礎を無視してやつたらそれは単なる独善ですから。絶対そうあるべきだと思いますし、同志社小学校も当然ながら、そこはきっちりやる予定ですよ。

丸中●もちろん小学校でやっていきます。**鈴木**●自由な教育をやるということと、基礎をやるということは別に相反することでも何でもないと思います。

丸中●やはり基礎の上に応用力は成り立っていくものです。たとえば算数の九九など、闇雲に最初から単に九九だけ暗唱させるのは一番手っ取り早いのですけれども、 6×3 が18だという、九九を忘れたときに6を3回足していけばいいんだという、そのところを分かつて覚える子ども、ただ単に先生やお母さんに覚えな

いと言われたから暗唱で覚えただけの子との違いは、将来大きく出てくると思います。ですから基礎、基本、そしてそれがなせなのかを理解できた上で、応用力を育てていく。そういうスタンスで小学校ではやっていきます。

金子●それから、つまり子どもはどのようところでつまずくのかという問題があります。たとえばペットボトルを1、2、3、4と我々はすぐ数えますが、つまり子どもは栓の開いてないペットボトルと開いてるのは違う、とこだわってしまうので数えられない。その子はパツになつてしまふ。でも子どもというのは、いろいろなことにつまずきながらそれを乗り越えていくんです。

だけどなかなか難しいですよ。人数を「何人」と数える時、男性と女性、皆一人ひとり顔が違う、それでなぜ数えられるのかと考えたことがあるのですが、これは大学生でもなかなか答えにくい。だから、そこを乗り越える前にかえつてつまずいてくれた方がいいのです。そこでこだわってくると、たぶん本当に分かる。ところが塾とかで $6 \times 3 = 18$ とちや

んと答えられる子は、それは正しい答えを分かっているかもしれませんが、でも理屈は分からないし、なんでそういうふうになるのか、数の面白さが分からない。やっぱり学ぶことは面白いんだ、あるいは体を動かしたら面白いんだと感じることによって、最終的にはそれでコミュニケーションができてたり、自分の思いが表現できたりするのではないのでしょうか。とくに低学年の段階でそういうものを獲得させて、表現できる、自己主張をちゃんとできる子どもにしておくことが、結局トラブルなどを少なくするのではい

ないかというところ、言葉が足りないのです。言葉に出せないから、暴力に訴えてしまつたりする。言葉という人間性に非常に重要なものを獲得させ、それとともにいろいろな文化を獲得させるということが、やはり大事なのかなと思います。

塘●たぶんバランスなんですよ。しっかり考える力を育てると同時に基礎・

基本の勉強をする、そのバランスなのかなと思います。

奥野●ゆとり教育というのは、今はゆるめ教育みたいに使われていますが、もともとは必ずしもそういう意味ではなく、子どもたちが生活の中で思考したり考えたりできる教育課程にしたいという理念だつたと私は理解しています。ところがそうすると、確かに授業時数そのものは減つた、そうすると学力低下だという単純な話になっていきます。

しかし、ゆとり教育を一番象徴している言葉に、当時ホワイトヘットの言葉を引用して「あまりに多くのことを教えることなかれ、しかし教えるべきは徹底的して教えよ」というのがありました。まさに自分で築かせる子どもにしていこう、しかしその中でも理解すべきことはきつちりと子どもたちに理解させていこうということですね。その理解のさせ方として、たとえば絵の話なら、影をどこにつけるかというのは、従来教師がここに影をつけられようなるんだよという話しかしなかつたのですよ。しかし、実際には子どもたちにその立体を描いて、こ

れが立体的に見えるにはどうすればいいかを子どもたちが見つけ出していく、これは問題解決型になるんだろうと思えます。こういう学習を重視していくことが、より胸に刻みつけるように基礎・基本を徹底することだと思えます。同志社小学校もそういうスタンスでやっていくことは間違いないところですし、そのところがないと物事が進まないということだと思えます。

鈴木●私も金子先生の発言はそういう発言だと理解しました。金子先生は居合道をやっておられますから、居合道の型は非常によく計算された上で出てきた型だと思ふのです。

金子●そうですね、そぎ落として、そぎ落として。稽古では悪いところは指摘してくれませんが、先生は基本的に絶対に教えません。教わる方は盗むというか、型を見てとにかく自分で解決するしかないんですよ。自分でやつて自分で体が動かなければできないわけですから。

奥野●居合というお話を聞いてよく分かりました。型、すなわち本質という意味ですね。

金子●型というのは非常に応用の効くものです。枝葉ではないのです。

石川●離を考えた上での守でなければならぬのですよね。

鈴木●少子化になってくると、だいたい親は子どもを全部満足させてしまうのですよ。子どもは幼稚園や小学校に入ってから、初めてそこでフラストレーションを感じるということにぶつかるわけですね。集団生活という場所でのぶつかり方ですよ。ある程度我慢することがないと、そのまま大人になってしまったら、ろくなことは当然ないわけです。我慢する必要のあるところでは、させないといけない。

総合学習の持つ意味は 必要性と運用次第

司会●総合学習について継続派、否定派、いろんな議論がなされていますね。総合学習についてはいかがでしょうか。

奥野●たとえば総合的な学習の時間にもしても、中学校の現場の先生方6割が反対だとおっしゃってるんですね。基本的には、人間力を身に付けさせようとする

総合的な学習の時間がありながらも、一方で求められているのはいわゆる狭い意味での学力、狭間に立った中学校の先生は、それなら曖昧な総合の時間などなくしてくればやり易いんだがなあ、という意味で6割が反対なのだろうと思うのです。つまり、本当にああいうことが必要ではないということではないのだろう。

おっしゃるように社会、理科があってもいいと思います。社会、理科がなぜなくなったかを時代背景で言いますと、日本があまりにも偏差値学力を求めてきた中で小学校1、2年生の時点から社会や理科がまったく面白くなくなりました。でもっと遊びを通して従来身につけてきたことを小学校の中でさせていって、どうなんだろう、ということ、本格的に科学として学習するのは3、4年生からでいいのではということだと思えます。そういう意味ではそれなりに意味のあることではあると思うんですが、ただその部分をしっかりと私たちが覚えておく必要があると思います。「生活の中で探究していく楽しさを身に付けさせ

トトしたのですが、実際現場の教師の方から教科書がないとやっぱりやりにくいなどという意見が出て、だんだんとああいう単元ができていったような形になってしまったのです。ただ実際は、生活科の単元として見てみると、昔だったら子どもたちが自然に身につけていった生活力を、今は学校で教えないといけない。

「おうちのお手伝いをしましょうなんて、何で学校で教えるの？」ということですね。そういう時代が変わってきたというのは、中身を見るとよく感じます。同志社小学校では、生活科を統合活動として、総合的な学習の時間の中で学んでいくことにしています。思いきったカリキュラムになるのではないかと考えています。

塘●総合学習のコンセプトはともいいので、運用の仕方次第だと思っております。今、目の前の子どもたちに何が必要なのか、だから何を教えるのかを教師がしっかり考える必要があるのではないのでしょうか。その上でいろいろな要素を入れて、総合的な学習を作り上げればいいのだと思います。ただもう一つ考えておかなければいけないのは、総合的な学習はとて

も準備が必要だということですね。そのための時間を先生たちにあげることが必要なのではないと思います。そういう意味でも、総合学習を行う運用の過程に問題があると思っています。

奥野●先週東京の私立学校を訪問してきましたが、その先生もおっしゃっていましたね。公立の総合的な学習の時間を見てみると、移行期間は非常に面白いものがいっぱい出てきたが、指導要領が確実に移行し終わった途端にまったく面白くない中身になってしまった。それは教師が何を教えていいのか確たるものがないという問題があり、また一方では、子どもたちの発想を抜きに「何を教えるか、あらかじめ基準をはっきりとしなさい」という文部科学省からの指導も強くなり、実践に広がりがなくなってしまうのです。つまり、子どもたちの実体においてだつたらすべて認めますよというスタンスが変わってしまったという問題で、二つの問題があるのだらうと思えますね。

石川●たとえば生活科で朝顔を教えるようにしましょう。「1年生だから、また朝顔を

る」という意識、子どもたちの発達の土台を豊かにしていくんだという意識を持って指導することが、子どもの学びにつながるんだという意識がなければ、生活科の時間というものは単に遊びの時間になってしまいます。発見できない時間になる。生活科の中で一番大事なのは、物事に対する知的な気づきなんですすよね。それを認められないとすれば意味がないことになってしまふだろうと思えますし、大きな意味でいうと総合的な学習の時間もきつとそういうことになってしまふだろうと思えますね。これは私の個人的な思いです。

丸中●中学校の先生に反対意見が多かったということは、結局、中高の先生は自分の教科というものがありませんから、その教科の枠からなかなかみ出ることができない。ところが小学校の教師は全教科担当ですから、いろいろな教科にまたがった活動が非常にできやすいという条件の違いが大きな差となって出てくるのではと思います。生活科が最初にできた時はもつと今とは違う趣旨で、もつと自由にいろんなことができる活動でスタ

を教えるのね」という教師と、同じ単元であっても「朝顔でこんなことを教えたーい！」という熱い思いで教える場合とでは、同じ内容、カリキュラムであっても結果が違う。この辺の教師の熱さといいますが、その単元に対する思いとかが、実はものすごく関わってきているのではないのでしょうか。

金子●一つは端的に言うくと、教員養成などに関わっている立場から言いますと、先生方が本当にそれを楽しんだ経験がないからではないかと私は思っています。ですから今、同志社大学で少なくとも総合的な学習に相当するようなものを学生たちに体験させて、生徒の立場で体験してもらおうと思つて、毎年この試みをしてます。嵐山までアイマスクをして歩く、京都の鴨川の源流まで行って下流のゴミの中を歩いてそれから水質を調べる…。最後には教職課程の中でそれが一番面白かったというんですね。それほど学生が打ち込むのはなぜかと思うと、自分たちが動いているから、主体でできるから。そういう経験をした人たちが教師になつてくれたら、そんなに大変に思わない



小学校校舎内部のイメージ図。正面1階に図書館、2階にチャペルを配置。

じゃないかな。今の行政は、そういう結果さえまだ出ないうちに指導要領をどんどん変えてしまう。

鈴木●それこそ逆に、文部科学省をゆとり教育しないと(笑)。

学校の中で 教師を育成するためには

司会●小学校の中で教師を育てていくというシステムについてはいかがですか。公立校では制約があつて難しいことでも、私学の同志社ではかなり自由な形で学校運営ができると思いますが。

奥野●私学と公立の圧倒的な違いは、建学の精神の有無だと思います。また、公立の場合は早いサイクルで教職員が替わりますね。私学の場合には本当にこんな子どもたちを育てたいんだという柱がありますから、そういう意味では教職員の中でのコンセプトは非常に立てやすい。そういう違いは大きいだろうと思います。

公立の場合は指導力不足といわれる先生がかなりあるんですが、一番多いのがコミュニケーションが取れない先生なんです。子どもとのコミュニケーションもそ

うですし、保護者とのコミュニケーションもそうです。一方同志社では、同志社の教育理念に沿ってこんなことをやって

いきたいと思う先生が育っていると思います。それには、先ほど石川先生から教師の熱さというお話がありました。本当にみんなで熱い一つの理念に向かつて、どれだけキャッチボールをし合えるのかということが、私は同志社小学校教育の基本になってくると思っています。

司会●先ほどから子どもを長い目で見ていくというお話がありました。同志社は先生に転動がないからこそ、長い目で見られるのかもしれないですね。

鈴木●そうですね。極端な例が慶應義塾の幼稚舎では、1年生から6年生まで一人の担任が一貫して全部最後まで見ておられます。そこまでやれるかどうかは別としても、ずっと見られるというのは大きな特徴ですね。そういう時に一番大事なことは、教師にしても親にしても子どもに対して過干渉になつてはいけないということ。子ども自身が本当に自分一人ですら立てるんだと思つたり、実は陰でどん

な援助をしてもそれをおくびにも出さず「よくやったね」と言う。そういうことをしていかないと、今の子どもたちは自尊心の低さをなかなか払拭していきないうらなあとおっしゃいますね。それが同志社の自由主義だったり、キリスト教主義の愛に裏打ちされた行為になるのではないかと思えます。

金子●その点では今実習に行っている学生が帰ってきて言うことには、あの先生とは普段あまり交流がなかったのに、ここまで自分たちや生徒たちのことを知っていたのかということに驚くというのですね。孫悟空が飛び回って印をつけたのは手の指だつたという話がありますが、目配りを行き届かせながらも、子どもたちに冒険もさせなければいけない。チャレンジというのは、今はまだ君たちは失敗ができる、前向きな失敗なら許される、やり直せるよということなんです。それをメッセージとして絶えず与えておきたい。社会だって失敗してもまだやり直せることを子どもたちには教えたいし、そういう社会であつてほしい。そういう意味では、先生方も多少失敗があつても

いいんじゃないかと思うのです。

鈴木●悪いことをしたことでも、何が悪かつたか。いいことをしようと思つて実は悪い結果になつてしまつたということがあるわけだから、そのプロセスも見ないといけない。ただ、もともと誤つたことをやっている場合は徹底的に注意しなければなりません。そういうことじゃないかな。同志社は個働不羈(ていどうふき)を認める学園ですから、良心に従つて正しいと思つてやつて失敗したのなら、それは認めるべきではないかと思えますよ。

石川●夢というわけではありませんが、熱くなれる一面を持った小学校でありたいですね。運動会になると先生がすごく燃えてしまつて、子どもから「先生、もっと冷静に!」と言われるぐらい熱い学校にです。

丸中●小学校は担任の先生の人柄と力加量(りきりょう)が、子どもたちに大きな影響を与えるところだと思えます。同志社小学校の場合はある程度の教科担任制を実施します。担任がお母さんで教科の担任の先生はお父さんみたいな形で、子どもがそこにに行けば違う自分に変身できるという

ところができて、きつと両者にとつてもいい関係が築けていくのではと考えています。

同志社小学校への期待

司会●そういう中で同志社小学校がスタートするわけですね。最初に鈴木先生から同志社小学校のコンセプトの紹介をお願いします。

鈴木●建学の精神のいわゆる三つの柱、これはもう言うまでもない。これは奥野先生がよくおっしゃる言葉を使わせてもらいますと、教育というのは、教の部分と育の部分がある。育むというのは、これは先ほどお話があったように、失敗を恐れずにやる、あるいは過程を重んじるということですね。

それから建学の精神があるわけですね。同志社はキリスト教主義の学校である。キリスト教主義の教育をめざしている。キリスト教というものを徳育の基本に置いた学校です。それから新島精神というものがあります。これはやっぱり離れることは絶対にできません。離れたら、同志社は同志社でなくなってしまう。そ

ういうものだと思います。

その中で一体何を同志社として重要視していくかということですが、私が最近一番好きな言葉でよく言うのは「一人一人は大切な人」という言葉。新島が外国に行っている間に退学になってしまった学生のことを思い、涙ながらに「もうやっってしまったことは仕方ないけれども、一人人は大切ですよ」ということを訴えた言葉です。当たり前なのですが、今の世の中は一人人の大切さが本当に忘れられてしまったのではないかと思います。この間のJRの事故もそうです。そういう一人一人の大切さを覚えられる子ども、物事についているんな見方ができる子ども。自分と違う見方があるということとを認められるような人間でないと、他の人は大切なんだということ覚えられないし、一人一人の大切さというのは考えられないでしょう。

それからもう一つは、聖書に「与うるは受くるより幸いなり」という言葉があります。新島が死んだ時に蘇峰が新島の教育精神を表す言葉として「彼らは世より奪わんとす、我々は世に与えんとす」

ますが、さまざまな国の人とコミュニケーションを取ったり、他国の文化を理解したりするのが目的です。そのためには自分の国の文化・言葉について、まずしっかりと理解を深めることが必要です。それが、真の国際人を育てることにつながっていくと思います。

石川●先ほど鈴木先生が言われた「一人一人は大切な人」という言葉。ものすごく大好きな言葉で、同志社小学校として決して忘れてはいけない姿勢だと思っています。それから学ぼうとする動機づけには、一般的に達成感を味わわせる内発的動機づけと、頑張ったねというふうに誉めるという外発的な動機づけがあります。それに加えて人に伝えたり、教えたりにする喜びから来る動機づけもあると思います。この3つの動機づけを考えた授業を構築していきたいと思っています。

司会●大学・女子大学の先生から同志社小学校に対する期待や、あるいは注文をお話してください。

金子●僕自身ももし何十年前に戻れて小学生になればいいのですが、そういう小学校になればいいのですが。

という言葉を選びました。これはおそらく聖書の言葉と同じだと思うのですが、そういう気持ちを持った子どもを育てたい。これは私の思いです。小学校の先生方は違う言い方をされるかもしれませんが、私はそういうふうに思っています。

司会●同志社に小学校をとというのは新島先生自身の悲願でした。それが今ようやく実現することになりますね。

鈴木●新島は、キリスト教主義教育をするには、幼稚園から大学まで一貫教育をすべきだと言っています。なぜかというと、先ほども少し丸中先生がおっしゃったのと同じことなんです。小学校の教育というのは、本当に自我の発達に影響を与える時期なんです。そういう意味で、新島が幼稚園から一貫教育をすべきだと考えたのは非常によく分かります。本当にキリスト教に基づいた同志社の精神を持った子ども、学生を育てようと思うのなら、幼稚園あるいは小学校からやるべきだと考えるのは当然だろうと思いますね。

司会●小学校の教諭として就任予定の先生方から抱負をお話してください。

堀●関わっている方すべてが、わくわくして楽しそうに見えるような小学校。今お話しを聞いていて、期待感が膨らんできています。

鈴木●真の意味での一貫教育をやりたいですね。大学と小学校が中学・高校をサンドイッチすることになりますので、大学はいい意味で中高に影響を与え、下から上、上から下全部のコミュニケーションを良くして、本当の意味での一貫教育ができるようにしたいと思います。

私はいつも言うのですが、同志社小学校を出て、自分で進むべき道を見つけてくれたら、結果として同志社という狭い枠の中に入らなくても良いと思うのです。同志社の法人内中学・高校に行かなくて別の学校に行ってしまうなら、それでもいいのではないか。あるいは大学まで来てくれたら、その人たちがコアになって同志社の精神、考え方を広めてくれる。そういう存在になってくれたらいいと思いますね。

司会●同志社小学校に大いに期待しています。本日はありがとうございました。(2005年6月20日有終館第1会議室)

奥野●「良心教育」を小学校でも大きな柱としていますが、良心というのは多様性を認めることであろうと思っっています。あるいは、相手の思いと自分の心が響き合う人間関係があるということだと思っています。その中で、価値観をしっかりと持って行動していく子どもを育てることだろうと思っっています。そういう意味では子どもたちが本当に実体験を行うことが大事だろうと感じますし、そのことが相手の痛み、本当に心の痛みが分かってくるということにつながっていくのだらうと思っっています。子どもたちの豊かな心を作っていくということをキーワードにしながら、温かさを基盤に人間関係を作り上げ、良心を涵養する教育につなげていくことが最も大切だと考えています。

丸中●やはり同志社ですから、具体的には宗教教育と英語教育の面を力を入れたと考えています。毎日朝の礼拝も行いますし、宗教の時間も設けます。小学校には白いチャペルができますので、そこで礼拝を行ったり集会をもったりする予定です。英語教育は1年生から毎日行い